

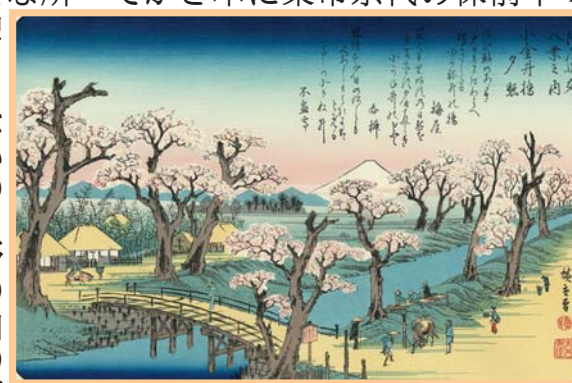
春になると日本人は必ず大和族の歌を愛する。さくら花の愛は、大和族の歌に集約されている。梅の歌も、大和族の歌に集約されている。



(上) 武蔵野小金井櫻順道絵図(幕末~明治初年頃の花見の案内地図)。分かりやすくするため、筆者が地名を書き込み色を付けた。

春風見れば、花の散る。さくら花の散る姿は、日本人の心を打つ。大和族の歌に集約されている。梅の歌も、大和族の歌に集約されている。

八景之内、小金井橋夕照。江戸近郊八景(天保八年-1837)より。小金井橋北岸より西を望む。この小金井橋が花見の中心地だった。富士が見える。老木も花盛り。何代にも渡り植え替えられた桜樹はこの頃は既に老木になっている。



(上) 歌川広重『江戸近郊八景之内 小金井橋夕照』<江戸近郊八景(天保八年-1837)より>。小金井橋北岸より西を望む。この小金井橋が花見の中心地だった。富士が見える。老木も花盛り。何代にも渡り植え替えられた桜樹はこの頃は既に老木になっている。

野山の花見の盛期は、江戸時代中期から後期にかけて。この頃は、江戸近郊の桜が盛りに咲き、多くの人々が花見に出かけた。

現在の小金井橋は、江戸時代中期から後期にかけて。この頃は、江戸近郊の桜が盛りに咲き、多くの人々が花見に出かけた。



(上) 上図と同じ方向から見た現在の小金井橋。桜の季節だが上水土手は雑木優勢になっている。しかし残っている桜は満開である。筆者撮影。



(上) 歌川広重『富士三十六景 武蔵小金井』<富士三十六景(安政六年-1859)より>。広重最晩年の作品。玉川上水北岸から西を望む。桜満開で、上水の流れは急。老木のうろから富士が見える。



(上) 春爛漫。今でも上水の桜はしっかりと咲く。小金井桜は現在でも多種類の山桜である。

江戸時代中期から後期にかけて。この頃は、江戸近郊の桜が盛りに咲き、多くの人々が花見に出かけた。

江戸時代中期から後期にかけて。この頃は、江戸近郊の桜が盛りに咲き、多くの人々が花見に出かけた。

江戸時代中期から後期にかけて。この頃は、江戸近郊の桜が盛りに咲き、多くの人々が花見に出かけた。



(上) これは山本松谷という明治の画家が描いた「国分寺停車場の図」である。花見酒で一杯機嫌の行楽客が国分寺駅から汽車に乗って東京に帰ろうとしている。百十五年前、明治三十九年頃の光景である。

江戸時代中期から後期にかけて。この頃は、江戸近郊の桜が盛りに咲き、多くの人々が花見に出かけた。

江戸時代中期から後期にかけて。この頃は、江戸近郊の桜が盛りに咲き、多くの人々が花見に出かけた。